



▲黒谷白沢の船木トシ子姉(イラスト・筆者)

町史

とっておきの話

291

只見ぜんめえ物語⑥(最終回)

トシ子姉のぜんめえ物語

船木トシ子姉(昭和一〇年生まれ)が、泊まり山を初めて経験したのは小学六年生のときでした。中学校を卒業したばかりの兄と二歳下の妹の三人で父のゼンマイ小屋に行きました。黒谷川の上流部にミズカゴザア(三籠沢)と呼ばれる支流があります。その入ってすぐの所に父親が建てたゼンマイ小屋はありました。間口二間・奥行三間で蒲鉾の形をした茅葺

小屋でした。父はそこに一人で寝起きしながらゼンマイ採りをしていました。ゼンマイを採むのは母親の仕事。毎日、通いで行っていました。ゼンマイ小屋までは自宅のある白沢から約一里、子どもの足で二時間ほどかかりました。父親の忠(明治四二年生まれ)は、「ゼンメエヤマは小さいときから覚えねえどなんね」が口癖でした。たぶん、父親自身も祖父から同じように諭され、この土地で生きてきたのだろうとトシ子姉は思います。

中学校に上がると(昭和二三年)本格的な泊まり山が始まりました。父親は学校の担任宛にゼンマイ採りのため一〇日間の休業を求める内容の手紙を書きました。ゼンマイ小屋は毎年ミズカゴザアの同じ場所に建てられました。残雪の多い山の夜は、とても冷えるのですが、茅葺の小屋

はそんなに寒くはありませんでした。朝ごはんの準備は主に父が行っていました。ご飯を炊いたり、みそ汁を作ったりしていました。その間、トシ子姉は、昼飯の弁当の準備をしました。弁当はいつも草餅(凍み餅)と決まっていた。草餅は一晩水で戻し、朝炭火で焼きます。ヨモギが米の三倍も入っているので一度焼くと昼頃まで柔らかく食べることができました。弁当にはこの草餅二枚の間に味噌を挟み、新聞にくるんで持って行きました。

昭和二八年、トシ子姉十八歳の年、船木家では初めて百貫のゼンマイを生産しました。この年の泊まり山には、父と二歳年上の兄とトシ子姉の三人で行きました。母はいつものように通いで小屋のゼンマイを一人で採む傍ら、独自に採ることもしていました。谷間に作られたゼンマイ小屋は陽がかげるのが早いです。陽がかげると母は山を下り家路についていました。自宅には学校に通う四人の子どもたちと体の弱い祖母がいたのです。そのため、母はどうしても家に戻らねばならなかったのです。当時、一番年下の妹はまだ五歳でした。

母はいつものように朝食の準備を済ませると、すぐにゼンマイを求めてひとり山に入りました。ある日、母が山から下りて来た際、その大きく膨らんだ背負い籠を見た近所の男が自分が背負って来たゼンマイとどちらが重いか比べてみようということになり、秤にかけてみると、なんと一七貫目で男を上回っていたといいます。こうして、母は早朝に自宅近くの山でゼンマイを採って来ると、後は祖母に任せて、すぐさま山小屋へ行きゼンマイ採りをしていました。まさに、二人分の仕事をしていたのでした。

しかし、その二年後の昭和三〇年、母が体調を崩しました。病院にかかるとうい臓がんと言われました。入院して手術もしましたが、病気の進行を食い止めることはできず、一年後の昭和三十一年七月母は亡き人となってしまいました。享年四五歳でした。ゼンマイの収入は、母の入院費用でほとんど底をついていました。

その年の秋の小学校の運動会には、トシ子姉が母親代わりで妹たちの学校に行きました。当時八歳だった末の妹は友達が母親と一緒に弁当を広げている様子を横目に見ながら浮かない顔をしていました。そんな妹にトシ子姉が「何でも買ってやっから、おがががいねえでやだって言うなよ」と言ったら、妹は「何もいらねえがら、おがががいればいい」と言って涙を見せました。トシ子姉は妹を抱き寄せうつむいたまま、膝の上で大粒の涙を落としました。

あれから六二年が過ぎた今年(平成三〇年)も元気にゼンマイを折る(採る)トシ子姉の姿がありました。トシ子姉は「山で汗を流すと、とても気分がいい」と笑顔を見せます。苦労したのも山ですが、心安らぐのも山。山は母のように傷ついた心を包み込んでくれているようです。

鈴木 克彦